

The Journal of True Care

2012
春号
Spring
【Vol.13】



株式会社創心會® 機関誌
2012年春号 Vol.13

「新入社員特集」

- ・ 提 言 03
- ・ 特集 顧客第一主義についての取り組み 06
- ・ コラム 14
- ・ お役立ちコラム 17
- ・ 認知症ケアプロジェクト
生活力デザイナープロジェクト 20
- ・ 感動体験 心のバトン 24

The Journal of True Care

2012
春号
Spring

[Vol.13]

» INDEX

P02	新入社員を迎えて 代表取締役 二神 雅一
P03-05	提 言 五感リハビリ倶楽部 認知症ケア専門士 浦道 さとみ
P06-13	特集 顧客第一主義についての取り組み 東岡山センター リハビリ倶楽部東岡山 管理者 社会福祉士 藤田 幸佑 創心会居宅介護支援センター笹沖 介護支援専門員 中村 成典 岡山ブロック ブロック長 社会福祉主事 河崎 崇史 訪問看護ステーション倉敷 エリアリーダー 作業療法士 佐伯 香織
P14-16	コラム 創心会居宅介護支援センター 介護支援専門員 猪木 真弓
P17	お役立ちコラム 創心会生活環境プランニング 原田 薫 創心会生活環境プランニング 濱田 美沙子
P18-19	新入社員特集 新入社員紹介
P20-23	認知症ケアプロジェクト 生活力デザイナープロジェクト 認知症部会リーダー 創心会訪問看護ステーション リハビリ倶楽部部門長 作業療法士 吉中 京子 琴浦センター リハビリ倶楽部琴浦 管理者 土澤 裕 訪問看護ステーション 理学療法士 千葉 好浩
P24-25	感動体験 心のバトン 本部センター グループホーム 一般 ヘルパー2級 宗吉 和幸 本社 業務管理 白神 光章 水島センター リハビリ倶楽部水島 看護師 橋本 美喜子
P26	ニュース トピックス 編集後記

新入社員を迎えて

代表取締役 二 神 雅 一

新入社員の皆様、入社おめでとうございます。数ある就職先の中から当社を選んでいただいたことを心から感謝すると共に、皆様方を歓迎いたします。

さて、新入社員の諸君はいよいよ社会人の仲間入りを果たしました。皆様方のご両親もさぞかし喜んでおられることでしょう。皆様方が今日この場に存在することができるのもご両親のお蔭であります。ご両親に対する感謝の気持ちを忘れずにいてください。そこで私からの提案ですが、初めて手にするお給料でご両親への感謝の気持ちを表してみたいかがでしよう。私はある会社の取り組みを知って大変感心したことがあります。それは親孝行手当というものです。その手法を少々拝借いたしまして、我社にも取り入れてみようと思えます。新人さんは夏季の賞与はありません。毎年寸志を出している程度ですが、今期からはご両親に感謝の気持ちを表し者にだけ親孝行手当として賞与（寸志）を支給することにしたいと思えます。従いまして、新人さんには目標管理の代わりに親孝行をした証明をレポートとして提出してもらったうえで、その結果や研修中の様子、配属されたからの姿勢などを考慮して支給することにしてみたいかと考えています。

しかし、そうした感謝の気持ちを形にする行為も大切ではありますが、私の本心（親と言う立場も少々含みながら）といたしましては、皆様方のご両親が皆様方のことを自慢の子供だと言って頂ける様な人財に成長することが何よりの親孝行になると思っています。それには何が必要でしょうか。それは一人ひとり違う「その人らしさ」という特性を存分に活かし、世のため人のためになれる存在に成長することです。特性を知る為には一生懸命取り組むことが必要です。一生懸命取り組むからこそ「特性」に気づくことができるのです。また、世の為人のためになるにはどうすれば良いのでしょうか。それは所属組織と一体化することが何より大切です。なぜなら、所属組織を通してでないと、社会に対して正当なアプローチができないからです。その証拠になる代表的な例が、サービス事業所としての指定は法人格に対してされるものであり、個人に対しては認められないということです。逆に皆様方が行なう行為は、所属組織が行なう

行為として認識されるのです。ですから所属組織が持つ使命感や目的に沿っていることが求められるのです。このような本質的なことは早く認識しておく必要があります。そして、所属組織と一体化するという意味は理念を共有するという意味です。創心會という会社には素晴らしい理念があり、ミッション・ビジョンが明確に示されています。この理念のもとに皆様方と一体化することを望みます。理念さえ共有できていれば多少の失敗しても全然構いません。むしろ若者らしくどんどんチャレンジして頂きたいと願います。とは言え、これからはお金を稼ぐものとして結果を求められる環境の中で生きていくこととなります。この結果を出すことにもっとも影響を及ぼすのは皆様方の心構えです。与えられた環境の中で、直面する仕事や課題にどのような態度で、どのような姿勢で、どのような意識を持って取り組んでいくのか。そういうことが最も重要な部分になるでしょう。結果を出すのに苦しむようでしたら、まずは自身の取り組む姿勢を振り返ってみてください。創心會人としてしっかり成長することを誓い、現場で元気よく羽ばたいて下さい。よろしくお願ひします。

また、既存のスタッフの皆様に対してお願ひですが、ご自身の新人の頃の気持ちを良く思い出し、新人さんがその特性をしっかり発揮できるようにサポートしてあげてください。正に創心流のリハケアの視点をそのまま新人さんに当てはめて、その気にさせるアプローチで接して頂くとうれしいかと思ひます。歡動共育環境の強化にご尽力いただきますようお願ひいたします。

提言

尊厳について考える



五感リハビリ倶楽部 認知症ケア専門士 浦道 さとみ

介護の現場で「尊厳を守る」という言葉を度々耳にすることがあると思う。しかし、「尊厳を守る」ということができていると言い切れる方はどれくらいいるだろうか。私も、「自分はできている」とは言い切れず、反省することばかりである。常に意識しておかなければならないことであるだろう。私が関わらせていただいている認知症の方の「尊厳を守る」ということが、どのようなことであるのかを、これまで自身が体験してきたことを元に提言させていただく。

キーワードは「接遇」である。私たちの接遇一つひとつがご利用者様の尊厳を左右している。

先日ある他社のグループホームに見学に行った。鍵がかかっており、インターホンを押すと管理者の方が、インターホン越しに「どうぞお入りください」と返答しロックを開錠してくださる。玄関に入ると玄関まで管理者の方が出てこられ、表情も冴えないままスリッパを出してくださる。訪問してから玄関に入るまでの段階でも、細かな気配りができているのか判断する材料になると思う。来客者に丁寧に接することができるというのは、ご利用者様にも同じようにサービスが提供できていることと共通していると思う。ここでは、玄関を来客者に開けさせるのではなく、玄関を開け、笑顔で出迎えて欲しかったと思う。

フロアには男性利用者が一人おられた。そのグループホームの職員の一人が、「ほら、できんからしてあげたよ」と声をかけているのが聞こえ思わず振り返った。「できんから」という言葉は、皆さんどのように思われるだろうか。「できない」ということをこちらが決めつけ、認識させているのではないだろうか。「できない」ということを本人が不安に思っている場合であれば、他者にもそう見えているのだと認識させてしまうことになり、不安を強くさせることにもつながりかねない。依存心の強い方であれば、退行の可能性も考えられる。できないという認識でない方に対しては、職員の価値観を押し付けているだけであり、できないことではないのである。その方にとっては“していない”“無関係”なことなのだ。それを「できない」と指摘されたらどのように

感じるだろうか。しかも全くの初対面の私がいる前で自分の価値を下げられている。

次に「してあげたよ」という言葉。その職員は若い女性。男性利用者にとって、その女性職員はどの視点で話をしていて、どのような存在なのだろうか。ご利用者様？ 家族？ 友達？・・・私の友達ができないことがあってそれがコンプレックスなら、そのような言葉は相応しくないとと思う。

言葉というのは時に暴力になる。たとえ身体的な虐待が行われていないとしても、一人ひとりがどのように感じているのかということは、イメージできても本心はわからないのだ。私たち介護者の言葉で、落ち込んでしまうことや怒りに変わることが考えられる。逆に嬉しくなったり、意欲が出たり、感動することもできるプラスの面も多くあり、私たちの言葉かけで幸せに包まれることもあると思う。一つひとつの言葉に心を込める、気をつかうことでプラスの面を引き出し、その方のQOLを上げていくことが『大切な関わり』である。雑な対応でマイナスな面を引き出すことはあっても、心のこもった丁寧な対応でマイナスになることはほとんどない。

では、先ほどの場合どのような対応が良かったのかというと、正解はわからない。なぜなら、その言葉が出た背景は不明で、その方の情報も不明だから。ただ言えることは、その方への思いやりのある温かい言葉を伝えることと、「できる」、「フォローがあればできる」「そうではない」の判断をきちんと行い、「さりげなく」フォローすることが望ましかったのではないかといえる。さりげなくフォローし、「できた」という成功体験に結びつくような気持ちになっていただける環境。自分の価値を自分で感じる環境。はじめから“していない”“無関係”な方には、自信をもって生活が続けられ、安全に生活できるように、気付かれずにフォローすることが重要である。少し負荷のかかることに挑戦される時にはモチベーションが上がるように、努力されていることへの感謝や乗り越えた先にあるもののイメージを共感したり、できているということを言葉に出して伝えたり、負荷を乗り越えられたことに対し一緒に喜ぶことが心のこもっ

た対応であると思う。さりげないフォローが職員の押し付けになってはいけない。

認知症ケアの場面で、「職員は距離を縮めるためにも家族のように話す」という言葉を耳にすることがあるが、“家族のように思い、親しみを持って話す”ことと“家族のように慣れ慣れしく話す”というの大きな違いがある。後者は絶対にしてはならないこと。ご利用者様には、愛するご家族様がおられるのだ。ご家族様の立場になって次の言葉かけについて考えてみていただきたいと思う。

「これしとって～」

「はい、ご飯」

「あ～、だめだめ」

「散歩いこうや」

「歩かないと、歩けんようになるよ」

家族として辛い気持ちにならないだろうか。自分の家族よりはるかに若い職員からそのように話され…。そのように話すということは、職員にそのように映っているということでもあり、人として尊重されているのかという疑心暗鬼になると思う。このような言葉も一つひとつ目的や意味を考え、心のこもった丁寧な優しい、温かみのある言い方に変えることは、その方への思いが強ければ強いほど、簡単に出来るのではないだろうか。職員は家族のように思っている、他者からみれば家族には見えないわけで、そのような対応を見せていると、この方はそういう対応でよいのかということ了他者に知らしめている、私たちに介護者によってご利用者様の価値を下げていることになるのである。

次に環境です。環境整備については以前より創心會で取り組んできた。環境を整備することもご利用者様の尊厳を守るという観点では必要不可欠である。

清潔を保つということは、基本である。特に水周りなどは不衛生になりやすい場所なので、常に気を配らなければならない。高齢者で体力も落ちており、病気を抱えている方が多い中で水周りが不潔になっているというのは、たとえフロアが片付いていても管理ができていない、サービスが行き届いていない、そのような環境下で過ごしていただくことに対し疑問を持たない職員がいるということになる。環境の中には、職員同士の関係性も入る。職員同士が笑顔でコミュニケーションが取れており、お互いを尊重し合える環境というのは、ご利用者様に伝わるのだ。清潔で不快感のない、明るい環境下で過ごしていただけるというのは、ご利用者様の価値をあげることになるのだ。

ご家族様は、世話になっているという負い目を感じていたり、もし、苦情を言うとご利用者様に悪影響が出るのではないかという不安から、諦めたり、ある程度目を

つぶっておられると思う。「家でみれたらこんな扱いされなくて済んだのに、自分の努力が足りないせいで…」と自分を責めてしまうかもしれない。特にグループホームの入居相談の場合は、ご家族様が限界ぎりぎりまで自分を追い込んで、自分で介護しなければならないという思いや、このままではつぶれてしまうという思いの中で葛藤し、グループホームの門を叩くご家族様が多くおられた。そのような時に不安をあおるような対応ではなく、「ここに入居したら大切にしてもらえ、父（母）が自分らしく安心して生活できる。大丈夫かな」と感じてもらえるような対応をしていかなければならないと思う。入居してからも職員の対応や環境を見て、「目にしたくないから父（母）から遠ざかってしまう」と思われたり、「もっと他に選べばよかった」という思いを持たれないように、ご利用者様のことを大切に思う接遇が必要になる。雑な対応をしていれば、どんなにその方を大切に思っている、それを伝えるのは難しいと思う。グループホームに入居されている方にとって、何より嬉しいことは、家族との楽しい時間を過ごすことだと考える。その時間をより多くとれるよう、職員はご家族様にとっても居心地の良い場所創りをする必要がある。デイサービスにとってもご利用者様以外の方も居心地の良い環境創りについては同じである。デイサービスに通うことを諦めではなく、前向きに感じていただく取り組みが必要になるのだ。

大きな声が出てしまう方など、他者とのコミュニケーションが難しい方ほど積極的に関わり、丁寧な接遇が求められると思う。どうしたらその方が安心して、今の生活を楽しんでいただけるのか、その方の笑顔が見たい、幸せを感じて欲しいと思う気持ちを職員は全身で表現する必要があると思う。職員がそのような関わりをしていると、他のご利用者様の視点にも変化が見られ、相乗効果を得られるのではないだろうか。

「丁寧な言葉に慣れていないので、言葉が詰まり出てこなくなる」と不安に思われるかもしれないが、それでも良いと思う。諦めるのではなく、言葉が詰まりながらも丁寧に対応してくれている姿には心打たれるものがあるのではないだろうか。私も言葉が詰まることや、もっと違う声かけをしていたら違った反応をされていたかもしれないと思うことがある。ご利用者様の反応をみて自分を省みるということを忘れてはいけないと思う。

二神社長が以前より“パーソナル”と提唱されていたが、心のこもった丁寧な対応をするためには、その方のパーソナルな情報をいかに収集し、把握することが重要になる。収集だけでなく把握していなければ宝の持ち腐れになってしまうのだ。身体的なことだけではなく、どのようなことで不安が強くなりやすい、どのようなこ

とでモチベーションが高まり、どのようなことに幸せを感じるのかなど予測していくことができる。また、一つひとつの反応に意味を考えるヒントになってくると思う。会話の中でも昔話に花が咲くかもしれない。自分との共通点を探したり、人生経験の高いご利用者様に様々なことを教えてもらえるチャンスでもある。そのように考えると、自分の視野や知識が広がるのでワクワクしてくると思う。そういった姿勢で職員がご利用者様と接することは、ご利用者様の価値を上げることにもつながると思う。

サービスを丁寧にするということや環境を整えるということは、ご利用者様お一人お一人を大切に思っているということ表現できるチャンスであると考えてみれば、職員自身のやりがいにもつながるのではないだろうか。

ご利用者様はもちろんご家族様にも、ご利用者様の最期の時に、人生を振り返って少しでも悔いが軽減でき、幸せを感じてもらえたらと思う。

最後に、認知症実践者研修を受けた際に、心に強く残った詩を紹介したい。

イギリスのある老人病院で、一人の老人患者の死後、後片付けをしていた看護婦が、その患者のロッカーの中から紙切れに書かれたこの詩を発見した。(出典不明)

あなたは何を見ているの、看護婦さん、何を見ているの
私を見ているとき、何を考えているの

気難しい老婆だ 頭はよくない
習慣がわからない ぼんやりした目つき
食べ物をこぼす、「ちゃんとしてほしいものだわ」
と言っても、返事もしない
私がしていることも気づいていない様子
私がしていることも気づいていない様子
物をなくしてばかり、靴下、靴・・・
とりあえずは、私がしたいようにはさせてくれる
お風呂も食事も こうやって長い1日を終わらせて・・・
こんなことをあなたは考えているの こんなことを見ているの

だったら目を開けて、看護婦さん あなたは私を見ていない
あなたに説明してあげるわ 私が誰なのか
ここに静かに座っているとき
あなたの言いつけ通りに行動するとき

あなたの思いのままに食べるとき

10歳の子供、父、母、それに兄弟姉妹といっしょ
みんな愛し合っている

16歳の少女 足には翼が生えている
もうすぐ出会う恋人を夢見ている

20歳の新婦 心が躍る
結婚の誓いを覚えている

25歳 私には子供がいる
頼りにされ、安全で幸せな家庭

30歳の女性 子供はすくすく育ち
永遠に続くと思える絆で結ばれている

40歳、息子は成人し独立して家を出る
けれど傍らで夫は私が悲しんでいないのを知る

50歳、再び私のひざには赤ん坊が遊ぶ
もう一度 子供たち 愛する夫そして私

暗い日が私を襲う 夫の死
私は未来を見る 恐ろしさで震える
子供たちは自分の子供たちを育てている
そして私は経験した年月と愛について考える

私は今 老人・・・優しさのない性格
年をとるとバカに見えるのはお笑いだ

体 それはボロボロ 気品と気力は消えうせ
かつての心は今や石
だけど、この老いぼれた体に、少女がまだ住んでいる
そして時々使い古された心が膨らむ
喜びを覚えている、苦悩を覚えている
もう一度愛に満ちた人生を生きている
年月について考える、あまりに短く、あまりに速く過ぎてしまう
永続するものはないという寂しい事実を受け入れる

だから、目を開けて、看護婦さん、目を開けて、見て
気難しい老婆を見るのではなく、私を見て
思い出して、この詩を
今度あなたが担当する老いた人に出会うときに

特集

顧客第一主義についての取り組み

施設内通貨制度 「ま〜ブル制度導入」

東岡山センター リハビリ倶楽部東岡山
管理者 社会福祉士 藤田 幸佑



はじめに

「ご利用者様のためにがんばる!」「とことん楽しむ!」これらの言葉を胸にプロジェクトメンバーは熱い気持ちで取り組んでいる。プロジェクトが発足してまだ2カ月程度だが、現在のプロジェクトの進捗、今後の展望などについて触れていきたい。

通貨導入の経緯

近年、脳の研究が進み、リハビリ効果が高まる手法が確立されてきた。その中の一つ「報酬系の刺激」である。創心会はこの報酬系の刺激に注目し、検討した結果、通貨という手法にいきついた。

施設内通貨を新しい制度として取り入れるが、今まで私たちが取り組んできたことをよりわかりやすく「見える化」したのともいえる。そのため、今まで通りご利用者様に向き合う心創りや、アセスメント能力の向上はいうまでもなく必要不可欠である。

通貨制度導入の目的

- ① 行為・行動の価値が目に見えるようになる
- ② リハビリ効果を高める
- ③ 活動量が増加する

① プラスのフィードバックをより促進

今までは、ご利用者様がリハビリメニューに取り組み、スタッフから『感謝』の言葉を受けていた。しかしそれでは、一時の嬉しい気持ちで終わってしまっていたことが多かったように思う。通貨を導入することで、よりわかりやすくご利用者様が頑張った証を手に入れることができる。そしてそれは、言葉という消えてしまうもの(忘

れてしまうもの)ではなく、何度も振り返ることができる(財布の中を覗いてニヤっとする)ものとなる。また、他者との比較が行え、自分の頑張りが実感できるようになることも大切である。

② 脳内の神経回路形成

通貨により、脳内ホルモンが分泌され、脳内回路の形成・活性化を図ることができる。脳内回路の形成というと分かりにくいかもしれない。そこで1つ例を出してみる。車を運転するとき、初心者マークを付けているうちは、腕や足、色々な所に力が入り、運転後に疲れた経験はないだろうか? 反対に、初心者マークが外れる頃になると、景色を見ることが出来たり、何か他の動作をしながらでも運転することが出来るようになり、あまり疲れず運転することが出来るようになるのではないだろうか? これは脳内で回路を構築できたためである。運転に不必要な動作(腕や足に力が入る)が削られていき、必要な動作(運転)のみが残り、回路が構築される。ご利用者様の多くは障害によってこの回路が遮断されてしまっている。そのため、リハビリを行い、回路の再構築が必要となる。その構築にあたり、この通貨制度を行うことで報酬系が刺激され、今までのリハビリよりも更に高い効果を狙うことができる。

③ 活動量が3倍

制度導入前後を比べると活動量が約3倍になったという報告(他社)がある。外発的動機づけによるものであるが、リハビリに積極的となり、楽しく行うことが出来る。今まで自分のためだけにしていたリハビリが、友達にコーヒーをおごるために頑張ったり、孫の喜ぶ顔が見たくて椎茸の菌床を目指して頑張ったり、リハビリをされる方も出るかもしれない。この制度はただのきっかけ、ツールに過ぎず、ご利用者様が頑張ったり、リハビリをして頂くための制度なのである。

この通貨自体は外発的動機づけに位置づけられるのだが、この外発的動機づけを上手く内発的動機づけにシフトしていくことができれば、約3倍の活動量にすることができる。現在、内発的動機づけで積極的にリハビリをされている方にも効果が期待できる。外発的動機づけと

内発的動機づけは両立することが出来ることが知られている。しかし、内発的動機づけの方に配慮なく外発的動機づけをしてしまうと、「アンダーマイニング効果」という内発的動機づけを減少させてしまう恐れがある。「この報酬はあなたの有能さを評価する証です」という情動的側面が強調されれば、「アンダーマイニング効果」は引き起こされないのだ。

● 運用方法

お品書きメニューをベースに価格を設定している。この価格に関しては、動機づけが必要なメニュー（筋力トレーニング等のしんどいもの）は、ご利用者様が稼げるメニューとして設定している。また、元々モチベーションなくとも要望されるメニュー（リラクゼーションメニュー等の気持ちいいもの）は、ご利用者様がお支払いするメニューとしている。これらは価格表として一覧にしているので、確認して受け渡ししていく。価格設定は、ご利用者様が1日を通じ、多くなり過ぎたり減り過ぎたりして、意欲を損ねないように設定している。この価格自体はプロジェクトで協議し、更新していく予定となっている。

受け渡しは、基本的に手渡しで言葉を添えて渡す方が望ましくなる。それは、前述した「報酬系」を考慮すれば、リハビリが終わった直後に渡すことが一番効果があるためである。この制度を上手にする1番のコツは「楽しむ！」ことである。

● プロジェクト紹介

二神代表、参謀本部の坪井さんが責任者となり、藤田は全体のリーダーを担っている。アドバイザーに、(有)リハシップあい代表 川本愛一郎氏がおられる。ブロックごとにリーダーを立て、リーダーと各センターのメンバーが密に連絡を取る。メンバーは新進気鋭の若手スタッフで構成されている。メンバーの中には、昨年入社した新入社員も在籍しており、若い力で推し進めればと考えている。

● 今後の展望

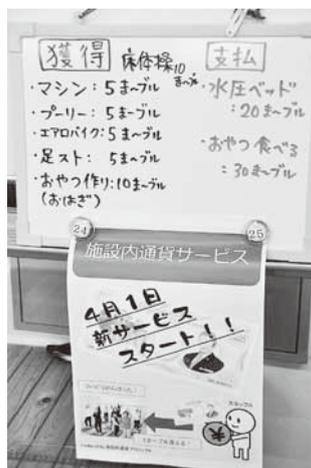
この施設内通貨制度は色々な可能性を秘めている制度である。様々なツールとして用いることはもちろん、施設内だけにとどまらず活躍の場を更に広げることできる。私が今思い巡らしている内容について以下に述べる。

まずは、施設内通貨を利用して広告としての機能を生かすことが出来る。今回、NPO法人未来想造舎和〜久のご協力の下、椎茸栽培が出来るようになった。この椎茸栽培をご利用者様、ご家族、CMに知って頂き、和〜久自体も広く周知出来るのではないだろうか。今回は和〜久とのコラボレーションでしたが、創心會グループは

他にも様々なサービスがあるので、グループホーム、福祉用具、ハートスイッチ、和〜久、それぞれと協力し、その宣伝媒体になれると考えている。

施設内通貨という名目ですが、地域との架け橋にもなれるとも考えている。アドバイザーの川本氏が語ってくださった「地域通貨」もその一つです。川本氏は各地域にあるデイサービスの施設内通貨を各国の通貨と同様に考えていた。みなさんが外国旅行に行ったときに、円をドルやポンドに両替するものと同じである。そこで、普段は関わる事のない方とも交流を持とうという考えである。

私自身は、地域通貨とのコラボレーションが出来ないかを考えている。地域通貨とは全国に点在し、その商店街で使える通貨、ポイント等を指す。岡山市でも地域通貨は存在し、岡山センターの近く、東岡山センターの近くでも実施している。その地域通貨が施設内通貨でも使用することが出来れば、ご利用者様がその商店街で孫に買い物をしてあげたり、日用品を買うことが出来たりするのではないだろうか。それは、創心会が目指す「住み慣れた地域で完結」「地域社会に貢献」といったことにも繋がるのではないだろうか。まだまだ遠い話で実現可能かどうか分からない話ではあるが、私自身も試行錯誤しながら楽しみ、ご利用者様、スタッフも楽しくこの制度を使い、盛り上げて頂ければ幸いである。



第1回旅リハ

創心会居宅介護支援センター笹沖

介護支援専門員 中村 成典



はじめに

まず今回ジャーナル執筆の機会を与えて頂いたことへの感謝と旅サポーターとして第1回旅リハへ参加させて頂けたことへの感謝の気持ちを申し上げたいと思う。

旅リハについて皆さんにお伝えしたいことはたくさんある。日帰りでは他県とはいえ比較的近場である福山への小旅行といった印象を受ける方もおられると思う。大きな事故やケガはなく、参加者全員が元気にご自宅まで帰ることが出来たとはいえ、それぞれの思いを胸に帰宅されたと思う。

不安と期待

複数回に渡る事前の打ち合わせにおいて、スタッフ内での不安が多くあった印象を受けた。サポーター以外の参加当事者の方々は、我々サポーター以上の不安や期待を抱えながら参加された方もたくさんおられたことと思う。不安を抱えながらも自分自身で、あるいは周りの人達に促されながらの参加の決断をされた方々の勇氣には敬意を払わずにはいられない。それと同時に旅することにより日頃の生活空間や対人交流を拓けたことによる効果はおそらく大きなものがあると思う。人は行動（例えば今回の旅リハ）することにより、失敗（転倒、ケガ、精神的苦痛など）することもあるだろうが、高いリスクを払った代償として得られる報酬は、とても価値のあるものではないだろうか、今回の旅リハへの参加を通して感じた。

旅リハレポート

(平成24年3月26日(日) 福山みろくの里へ)

中型バス1台と大型バス1台が創心會本部横の用水路脇に横づけされていた。そのバスのボディーを正面から見ると大きな歌舞伎役者のような表情がペイントされており、力強いイメージを魅せつけているようで、参加者とサポーターの気持ちを奮い立たせるような雰囲気醸し出していた。

参加者は様々で、大勢の家族に見送られる方、息子様や娘様に車で送って頂いている方、ご夫婦で仲良く参加される方、ご自分1人で車を運転して来られトランクから重たそうな車イスをなんとか自分の手で引きずり下ろし、杖を片手に持ち重そうな自分の不自由な足を引きずるよ

うにして歩かれている方など、続々と本社に集まって来られる方々を不安感と期待感の入り混じった気持ちで駐車場に誘導した。そして、当日は強風に加えて気温も低く、外に立っていると体が震えてしまうほどであった。

福山へ向かう途中、高速道路のサービスエリアでトイレ休憩をとった。3月末だというのに雪も降り始め、皆さん不安な表情でバスの中からそれを見つめておられた。雪模様の天気でしたが、現地へ到着する頃には天候も晴れとなり、「晴れ男・晴れ女のおかげだ!」とバスの中で笑いが起こりつつ、皆さん明るい表情でバスを降り、昼食のレストランへ向かった。

昼食後、少し気分を悪くされる方もおられたが、サポーターがいち早く気づき、適切な対応をしている姿も見られた。他のサポーターの皆さんも参加者と、とても良い距離感を保ちながらも移動の要所要所など細やかな心使いをされており、顔には一切出ませんが、真摯な態度で明るい表情で精一杯のサポートをされており、見てい

最後に

行きバスでは皆さんよそ行きの顔をされておられたように感じたが、帰りには不安もとれて、屈託のない笑顔で充実された顔つきへ変化されているようであった。自信もついたのか、たくましさもみえました。

「今度は泊まりで行きたいなあ」とか「韓国もえーなー」「(嫁には内緒で) もっと酒を飲みたかったなあ」と冗談交じりの会話も多く聞かれた。皆さん少しずつ自信をつけていけば、海外も夢ではないかもしれないし、目標は高いほうがよいとも思う。海外へ行く際には、ぜひ本当の意味での「通訳」として参加したいと勝手に思いながらその会話を聞いていた。

一緒に旅行をして同じ時間、同じ経験を共有して親近感も湧き、参加者とサポーターの距離も縮まったようだった。無事本社へと戻り、皆さんそれぞれ自宅へと帰って行かれた。あっという間の旅ではあったが、皆さんそれぞれの思いを胸に帰路につかれたことと思う。

次回は6月、島根・鳥取などを検討中とのこと。今後も事故なく、参加された方々が「参加して良かった」、「ドキドキしたけど結構楽しかった」、「あそこの階段はきつかったけど、なんとか頑張れたぞ」、「もっとリハビリ頑張らないとといけないな」と、それぞれの目的を持った旅リハの輪が広がっていくことをイメージしながら旅リハサポーターとしての1日を終わることが出来た。



ご利用者様による食事会の企画 —ピアグループ形成支援—

岡山ブロック ブロック長
社会福祉主事 河崎 崇史



本稿は、5年前ご利用者様らが自ら企画して実現された食事会についての内容である。通所介護から一步外へ出たイベント、つまり「ミニ旅リハ」ともいえる企画であった。現在、創心會ではご利用者様を主とする旅リハ企画が始まり、3月26日には福山みろくの里へのバス旅行へ参加された方もおられる。6月には島根への旅リハも企画されている。今後私たちが旅リハや外出支援に携わる機会は増えてくる。ご利用者様同士のピアグループの形成支援や旅リハ・外出による効果を、本稿から参考にさせていただいたら幸いである。

症例紹介

A氏、60代、男性。脳梗塞による左片麻痺。病前はバスの運転手。趣味は家庭菜園や庭木の剪定であった。

1. 現病歴

X年2月、脳梗塞を発症。左片麻痺を認める。X年5月、自宅退院し訪問リハビリ（創心会）と通所リハビリの利用開始。X年12月から通所介護（創心会）を週3回利用開始。

評価

1. 全体像

自宅退院後、創心会の訪問リハビリ（週2回）とB通所リハビリ（週2回）を6ヶ月間利用した。同年12月、介護認定が要介護3から要介護1へ変更され、自宅近くに開設された創心会リハビリ倶楽部築港への利用開始となった（訪問リハビリと通所リハビリは中止）。当時の目標は、A氏の年齢が若いので、リハビリのできる通所介護でADLの現状維持・向上を図り、社会参加ができ、在宅生活の継続ができるように支援することだった。

2. 身体機能

《初回：X年12月》Br-stage上肢Ⅲ、手指Ⅳ、下肢Ⅲ

《中間：X+2年12月》Br-stage上肢Ⅳ、手指Ⅳ、下肢Ⅲ

3. ADL状況（X年12月）

食事、整容、排泄、更衣、入浴、起居動作、移乗：自立。必要に応じて、片手でできない動作は介助。

移動：屋内は独歩で自立。屋外はT字杖で自立。歩行時、やや膝屈曲、振り回して進行する傾向。

目標

①脳梗塞の再発防止、②心身機能の維持・向上、③ADL自立、④役割の獲得：家事や犬の世話、家庭菜園を楽しむ、⑤バスを利用した外出

治療

1. 経過（全体評価）

リハビリ倶楽部の利用当初は、病院入院時に同室だったHさんと交流するのみで、Hさんが休みだとわかればA氏も休むようなこともあった。口数が多く、調子によって他ご利用者様へちょっぴり悪戯心を出しやすい性格で、ときにエスカレートすると短気・癩癪を起し口論することもみられた。リハビリには貪欲で、自発的に運動負荷やトレーニング内容を管理するようになり、次第に身体機能が向上し、室内では独歩が可能となった。他ご利用者様から目標の存在として慕われるようになり、次第に自信をもてるようになったのか、表情が豊かになり、周囲に気を配る様子や自分より頑張っている他ご利用者様にねぎらう声をかけるようになった。利用当初のように、癩癪を起し口論することはなくなっていった。

2. 生活空間・対人交流の拡大

【麻痺側上肢の機能向上～趣味であった盆栽・庭木の剪定に挑戦～】

A氏のADLの回復がある程度維持されてきた段階で、リハビリ倶楽部内での過ごし方に力をもて余してきている様子が伺えた。事前にA氏が盆栽・庭木の剪定を趣味にしていたことを踏まえ、リハビリ倶楽部の庭木の剪定のために庭木鋏を貸していただけないかとお願いしたところ、「うちにある！持ってこよう」と言われた。庭木鋏を持参していただいた日のこと。筆者が「庭木の剪定をぜひご指導いただきたい」と屋外に連れ出したところ、間もなく「ちょっと貸してみられえ」との声が上がり、伸びきらない麻痺側の手を添えて鋏を使いはじめた。「切り方はどうする？どこまでする？」と尋ねるA氏に、筆者は「あそこをもっと！そんな感じです！」などと注文をつけながら自由に剪定をしていただいた。作業が終わり、庭木鋏をご本人にお返しし、「また来年もお願いします」と感謝をお伝えした。後日、ある別のご利用者様からA氏が家の庭木の剪定に来てくれたと情報が入った。「またいつでも行ってあげるよ」と談話するご利用者様らの姿がそこにあった。

3. ピアグループ形成支援

【デイサービス利用者による行事開催～企画に対する主体的活動～】

《食事会・企画段階》

X+1年8月、A氏が管理者である筆者のもとへ相談にきた。「わしらそろそろ旅行などに行けんじゃろうか」と言われる。A氏だけのことではなく、リハビリ倶楽部のご利用者様全員と一緒に旅行に行くことはできないかという趣旨だった。スタッフとの協議のうえで、日帰りでの食事会という企画を行うこととした。A氏には本企画のリーダー役を依頼した。具体的には、①ご利用者様への企画案内と20名以上の参加者確保、②企画内容を主体的に構築するためにミーティングに参加すること、③家族に理解を得て自己の責任をもって参加することであった。

A氏はさっそく参加者を集めるため、ご利用者様に広報していった。よろこんで賛同するご利用者がいる一方で、自分の身体機能で参加したら皆の足手まといになってしまうから参加しないというご利用者様も現れた。長らく健常者の生活圏内から遠ざかっている方には未知なる企画で、不安が先に立ち消極的になるのは自然なことであった。また、A氏にとっても自身には障害となっていないことが他者にとっては大きな障害であることの予測ができないため、勧誘しても断られたと悩んでいた。

そこでスタッフはそれぞれのご利用者様の不安要素に対して、具体的解決案としてイメージを湧かせてもらおうと、行き先が決まるとすぐに食事会を行う現地へ出向きビデオで撮影し、後日リハビリ倶楽部で放映した。エントランス→エレベーター→通路→テーブルや座席→トイレ空間に至るまでの一連の様子をリサーチし、リハビリ倶楽部との違いと、どのようにすれば各個人の身体機能で適応できるのかを解説した。それにより、座位保持・歩行能力を高めること、排泄対応、食事・水分管理など、個別に対応できることですべてのご利用者様が参加できるという見解になった。A氏の士気は高まり日常的に皆を励ましていった。「○○さんも一緒に行こうで、そのためにリハビリ頑張りうで」そんなセリフがA氏の日課ようになっていた。《食事会》

食事会当日、背広にサングラス姿のA氏が来所。他男性ご利用者様もジャケットスタイルの正装で来所。女性はメイクや装飾品を身につけ、前日に美容院にまで行って備えた方もいた。出発前から皆が待ちわびていたことがよくわかった。

午前10時

皆で企画したツアーに向けていよいよ出発。一同車両に乗り込み、最初の目的地、岡山市浦安の総合公園(写真1)に到着。花や緑と開放的な園内を見渡しながら、思い思いに散策するご利用者様の姿があった。

続いて向かうのは、岡山市駅元町にある岡山全日空

ホテル(写真2)。いよいよシミュレーションの成果を試すときとなった。事前に最も入口に近い場所で乗り付けさせていただくようお願いをしていたとはいえ、入口のロータリーには20階のレストランスタッフがわざわざ出迎えてくれ、エレベーターホールまでのガイドに立ってくださった。アスファルトの路面から分厚い絨毯のフロア、高層エレベーターを抜け会場に案内される。見晴らしの良い個室が用意してあった。随時着座していくご利用者様は少々緊張ぎみであったが、乾杯～会食が進むにつれ表情豊かに会話が始まった(写真3・4)。

午後3時

リハビリ倶楽部へ帰り、一日の感想やフィードバックをご利用者様一人ひとりが交互に行うたびに、実感を噛みしめるようにうなずくA氏の姿があった。早くも「次は新年会をしよう！その次は花見に行こう！」などと参加者からはアンコール企画がもち上がっていた。A氏の表情は一仕事やり遂げたことで充実感に満ちた男の顔になっていた。

4. 社会参加への支援

【第2回食事会の企画運営、会場の予約～バス等、公共交通環境への適応～】

X+6年4月。A氏は大きな自信をつけ、第2回食事会の開催に向けて、自主的に行き先を定め、ホテルにアポをとっていた。「岡山国際ホテルに問い合わせたら、30人くらいで貸し切りの部屋を用意してくれるらしい。食事代は一人2500円くらいだそうだとスタッフへの交渉も慣れたものであった。前回の経験を共にしたピアグループの結束は驚くほど強固になっており、「食事会の前に護国神社でお参り兼歩行訓練をする」、「食事会ではご利用者様代表とリハビリ倶楽部代表から祝辞を述べてもらう」などの演出も組み込まれていた。A氏は自宅で一人段取りを考えていたのだろう。A氏の手には、何度も消しゴムを使い修正したと思われる行事プログラムのメモが握られていた。

この頃、A氏は一人でバスに乗って天満屋まで行き、エスカレーターに乗れたなどの体験記を語られるようになった。今思えば、「リハビリ倶楽部の利用者」というフィールドから卒業しようとしていたのかもしれない。第2回食事会に向けて各々層のリハビリと支度をしている輪の中で、前回同様皆を励ますA氏の姿があった。ところが、決行の5日前に筆者へ電話が入る。「具合が悪くて病院を受診したら、検査入院するようにすすめられた。申し訳ないが後の取り仕切りをお願いしたい」と神妙な面持ちで相談してこられた。悪性腫瘍の可能性があったらしい。他ご利用者様はA氏が当然のごとく当日復帰されることを願っていたが

それは叶わなかった。(検査の結果は十二指腸潰瘍であった。)

趣向を凝らした食事会の祝辞では、ご利用者様から自信と感謝に溢れたスピーチが披露された(写真5)。「皆さんのおかげで、おしめが取れました。この会食を取り仕切ってくれたAさんと創心會に感謝いたします」と綴られたスピーチに、「Aさんがここにいればよかったのに」と皆が思っていただろう。スピーチを聞くご利用者様の中からはすすり泣く声もあった。(写真6・7)

その後、A氏は元気になってリハビリ倶楽部へ戻ってこられた。「おかえりー！」と復帰を喜びご利用者様たちは一段とピアグループの絆を深めているように思えた。その後、「きらり祭」(リハビリ倶楽部内の行事)の打ち合わせのために、利用日でない日はバスで来所された。リハビリ倶楽部で卓球を機能訓練にしていたことから、自宅近所の卓球場で学生と試合をしてきたり、自宅の菜園で育てた野菜を調理訓練に寄贈してくれることもあった。介護保険制度の認定更新で要介護1から要支援認定へと区分を変え、いつしかリハビリ倶楽部にはほとんど通われなくなっていた。時を同じくしてスタッフからは目撃証言があがるようになった。「散歩をしていたら偶然出くわしたよ!」「バス停の前でAさんを見た!」「親友のHさんの入所先に遊びに来ていたらしい」など。A氏の生活はすでに社会環境にその適応の場を移していたのである。

● まとめ：リハケアの視点

本症例における「生活の質的向上phase」のポイントは、何のために、誰のために次なる可能性を展開するかである。A氏は疾患の上では維持期であるが、生活の上では回復期を追い求めていくことが必要ではないかと察せられた。ただ目先の外出支援やピア活動に走れば安っぽい体験になり、障害需要や自立の動機づけに逆効果になり得る。QOL欲求を湧き立たせるようにするには仕掛けをつくること、そしてサインを見逃さないこと。その秘訣はその方の人生歴や今の生活を追体験するように心がけ、ADL状態や後遺症の特性を模倣し、言動の奥にあるニュアンスを探り、共通言語に表現しケアチームで共有すること。「わしらそろそろ旅行に行けないか?」というサインを見逃さず、即時に役割期待に展開できたのは、援助者が仕掛ける準備をしていたからである(将来イメージを仮定する感性と詳細な洞察の積み重ね)。大切なのはケアが援助者だけの自己満足になってはいけないこと。「リハビリ倶楽部でできる援助はやった」とか、「この方はこういう生き方で十分」とか、「ここまではできないから介助する」など、無意識にご利用者様の

限界を決めつけて妥協してしまうことは意外と多い。ご利用者様からすれば援助者のおごりであるし、正当化しているに過ぎないと思うので、必ず私たちは自己への客観視を心がける。またご利用者様の言動に過敏に反応してもいけない。深層心理をよく探って、相手が本当に求めている本質を返答する。コミュニケーションの渦の中でご利用者様が自分から選択・決定するように仕掛ける(促す)ことがポイントである。



写真1：浦安総合公園



写真2：浦安総合公園



写真3：浦安総合公園・集合写真



写真4：全日空ホテル20階レストラン



写真5：岡山全日空ホテル玄関



写真6：症例の満足した笑顔



写真7：20階レストラン

訪問リハビリ部門自助具 班の紹介&取り組み報告

訪問看護ステーション倉敷
エリアリーダー

作業療法士 佐伯 香織



はじめに

その方の機能に応じて作る、生活に役立つ便利グッズを自助具と言う。

当初、本部リハスタッフの下期の取り組みとして、作業療法士の多いリハ部門の特性を活かし、自分たちで自助具を作成&自助具に対する知識を深め、ご利用者様の訓練に活かすことを目的に自助具係を発足した。その取り組みが理解され、展示スペースを頂き（本部ネオ、研修室の間の廊下。カタログ棚横）本部リハスタッフだけでなく、部門全体の取り組みとして社内・外に発信させて頂けることとなった。

今回は、皆様に自助具や自助具係の取り組みについて知って頂き、ご利用者様の支援に役立ててほしい…と考え自助具班の紹介と取り組みを簡単にご報告させて頂く。

経緯

現在、訪問リハのサービス提供の際に、福祉用具や自助具を提案するに当たって、物品が手元になく、カタログ等での紹介となっており、うまく提案が出来ていない現状にある。スタッフが個人購入し提案している場合もあり、金銭負担や、せっかく購入した物品も他スタッフに活用されない現状がある。また、経験年数の少ない若いスタッフが多くを占めており、福祉用具や自助具に関する知識が乏しい傾向にあると考えられる。そのため、多くのご利用者様に紹介する頻度の高い自助具や、お試して提案したい福祉用具等（安価なもの）について、作成や提案、貸し出しの体制を整備したいと考えた。

ご利用者様に応じたアイデア自助具を作成したり、タイムリーに提案できる体制を整備することで、作業療法士の多い当社の強みをつくるきっかけとなると考えた。

メンバー紹介

初期メンバー：佐伯、松浦、竹田、後藤（プランニング）

4月～追加メンバー（各エリアに1名ずつ配属）：
岩井、山内、石井、曾根崎、向井

実施内容

- ①月1回のペースでテーマを決め、生活に役立つ自助具を作成し展示する。
- ②提案頻度の高い安価なアイデア商品や福祉用具を展示する。
- ③上記の自助具や福祉用具を、訪問リハのサービス提供の際、ためし使いが出来るように貸し出しの体制を整える。
- ④自助具の専門班として、他スタッフからの相談を受け、適した自助具の提案をおこなう。（場合によっては作成を行う。）

下期月間スケジュール

- 2月：食事（4月展示） 3月：更衣（5月展示）
4月：入浴・排泄（6月展示）
5月：整容・コミュニケーション（7月展示）
6月：移動・移乗・家事・余暇（8月展示）

効果

- ・一般的にメジャーな自助具や、ご利用者様が工夫して作られたアイデア自助具を自分たちの手で作成・紹介することで、スタッフの知識と自助具作成のスキルが高まる。
- ・訪問時ご利用者様に提案する頻度の高い自助具・安価な福祉用具をリハの物品として購入・管理することで、ご利用者様に提案しやすい体制が構築される。
- ・物品を本部の共有スペースに展示し、全スタッフが手にとって試し使いできるようにすることで、全社員の自助具・福祉用具に対する知識・関心が高まる。
- ・物品の貸し出し体制を整備することで、創心會のご利用者様の生活・QOL向上に寄与できる体制が築ける。

今後の展望・おわりに

今後の展望としては、ご利用者様にアンケートを実施し、実際のお困りごとに対して個別のケースに応じた自助具の作成を行うことや、ホームページや社外誌へ記載し、作り方や取り組みについて発信していくこと。自助具だけでなく、トレーニング用の物品（チューブや重り類、各種足底板、スプリング素材など）もご利用者様に提案しやすい体制を構築していければと考えている。新しく始めたばかりで、試行錯誤しながら進めているので、気になった点やアドバイスなど、係の者にお声かけ頂ければと思う。また、関わっているご利用者様の相談など、適宜お受け致しますので、どしどしご相談頂き、活用して下さいと思う。

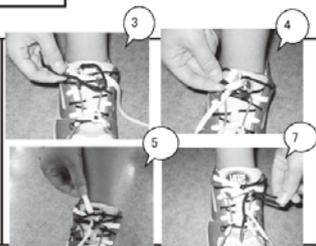
現状で満足することなく、ご利用者様の生活が豊かになるための提案力を各個人がつけていくことで、よりご利

用者様に貢献出来る組織になると思う。ぜひ、今後も自
助具係の取り組みにご注目いただきたい。



結いちゃん（靴紐結び）

更衣



・説明文：片手で靴紐を結ぶためのアイテム。手順を覚えると方麻痺の方でも自分の靴紐を自分で扱えます！

・対象者：片手のみ使用されている方、(脳卒中の場合理解力のある方)

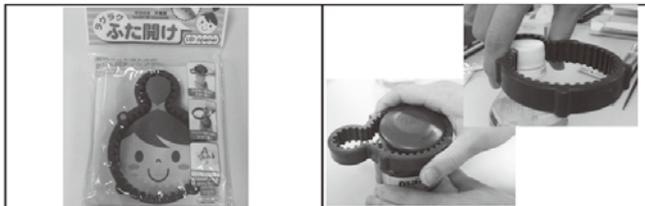
・使用方法：①紐を交差させる。②自助具をひもの先端に引っ掛けセットする。
③一方の紐を反対の力半に引っ掛ける。④もう一方の紐を上からかぶせ、
出来た輪の中をくぐらせる。⑤くぐらせた紐を引っ張る。
⑥引っ張って出来た輪をもう一方の力半に引っ掛ける。
⑦一方に引っ掛けていた輪を引っ張って締める。⑧自助具を抜いて完成！

・購入先・金額：100円程度（家にあるもので作可能）

・備考：使用物品・・・針金ハンガー（40cm分）、ビニールテープ、滑り止め、輪ゴム
注意点・・・手順を覚えるまで時間がかかる方もおられるかも知れません。

ラクラクふた開け

食事



・説明文：小さなちからで楽にふたが開けられます。
(展示品は100均。ビンふたとペットボトルの共用タイプ)

・対象者：手指筋力低下している方、関節リウマチの方

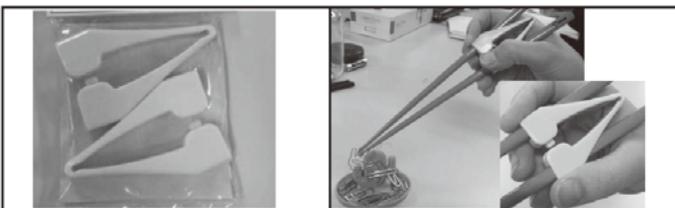
・使用方法：ボトルオープナーをあけたいビン（ペットボトル）のふたにかぶせ、
反時計回りにまわす。

・購入先・金額：ダイソー（100円）、海援隊（1,260円）その他、バリエーション様々あり。

・備考：

らくらくクリップ

食事



・説明文：手持ちの箸に差し込み少ない力で箸の閉じ開きが可能になる。100円で2個入り。

・対象者：手指筋力低下している方

・使用方法：箸に差し込み、クリップが固定される位置に調整する。右図のように装着。

・購入先・金額：百貨にて購入。 100円

・備考：クリップの内径6～7.5mm 角箸用だが、丸箸もサイズによっては使用可能。
耐熱温度100℃



コラム

『今 思うこと』

創心会居宅介護支援センター 介護支援専門員 猪木 真弓

はじめに

私が創心會に入社して1年が経った。この1年を振り返ると、今までとは違う環境、仕事内容の中、たくさんの皆様に支えていただきながら、学びの多い、とても貴重な1年になったように思う。この1年という節目にあたり、このように原稿執筆の依頼をいただき、大変恐縮しながら、寄稿させていただく。私が創心會に勤めるようになった経緯、私の価値観等をお伝えできたらと思う。

また、今回の寄稿に際して、私が担当させていただいているご利用者様から、読者の皆様にメッセージを寄せていただいたのであわせて掲載する。

創心會という選択

私は今、介護支援専門員という職に就いている。前職は介護福祉士として、老人保健施設の認知症棟での勤務、重症者棟での勤務を経た後、通所リハビリでの勤務をしていた。施設での勤務をしながら結婚、出産、育児を経験してきたが、施設勤務との両立は今思うと、本当に過酷であった。「夜勤のない仕事に就いてほしい」という家族の言葉がきっかけで前職を辞めることを決意した。しかし、前職を辞めたのは家庭との両立が過酷だったからだけではない。私が介護職を志して学校で学んだことは、実際にご利用者様の介助方法もそうだが、どちらかといえばコミュニケーション技術、認知症の方の心のケア、介護職としての自己覚知の重要性といったことが中心であった。しかし実際に現場に出て感じた違和感がいつまでもなくならず、自分の中で家庭との両立を乗り切るだけのやりがいと専門職としての自尊心が守れなかったのだと思う。現場に出て感じた違和感とは、入所施設で勤務したことのある方であれば多くの方が感じたことがあるであろう、流れ作業のような慌しさである。仕事には手際の良さが求められ、常に時間との戦い。そうしなければ、入所者様の生理的欲求も満たせられないといっても過言ではない状況であった。また、私が勤務していた施設が老人保健施設という、本来は在宅復帰を目標にした施設でありながら、実際には特別養護老人ホー

ムへの入所待機者であふれているという中途半端な位置にある施設であったことも関係していたかもしれない。在宅復帰を目標にして立てる介護計画はほとんどの場合達成できていなかった。ゆっくりとご利用者様の言葉を汲み取る時間は自分のプライベートな時間を多く割かなければなかなか持てず、家庭との両立が必須だった私には難しいことであった。そんな中、通所リハビリへの異動が私に転機を与えた。

通所リハビリでの勤務は同じ建物内にありながら全く質の違うものであった。それは、対象ご利用者様が、在宅生活を送られている方々であるという大きな違いである。入所生活を送られている入所者様の方々と比べ、住み慣れたご自宅、地域に帰って行かれるご利用者様は私にとって、とても生き生きとして映った。「やっぱり家がいいんだ。」そう確信して在宅支援の仕事をしていきたいと思ったのだ。そして以前から興味があった創心會のホームページを見ているうち、職員が生き生きと働く姿、ご利用者様のリハビリへの意欲に感動し、入社試験を受けることにした。入社試験の申し込み当初から会社の人事の方々の対応に良い印象を受けていた。さらに社長との面接後、社長が私を玄関まで送ってくださった姿に、「この会社で間違いない！」と思った。

働くということ

実際に創心會に入社してみて、職員の方々の人への接し方に感動した。誰にでも気持ちの良い挨拶をするのは勿論、常に心が開かれている状態で接してくれるというか、とにかく他人を受け入れる準備ができている状態を感じた。それは創心會という会社が長所伸展の考え方を大切にしており、それが社員に浸透しているからなのではないかと私は思う。他者の良いところに目を向ければ自然と他者を快く受け入れることができるようになる。そして自分に対しても良いところに目を向けることで、前向きに自己実現していく力が湧くのではないかと私は思う。私が入社試験の時に受けた良い印象は今でも変わりがない。

私は今このように心地良く働くことができる環境に本

当に感謝している。それは会社の方々にもそうですし、私を支えてくれる家族、友人、地域の方々、私を頼りにしてくれるご利用者様、たくさんの皆様のお陰で私は楽しく働いている。家庭を持って子育てをしながら仕事をするというのはそれなりに大変な時もある。だが、私にとって働くということは人生を楽しむ上で必要不可欠なことだと考えている。「介護」という領域で働いていると、いろんな物事に会い、たくさんの人に出会う。働くことを通じていろんな感動を受けることがあります。それはどれも人と関わったり、人を想ったり、人から影響されて、起こっている。人との関わりが私の人生を豊かにしてくれていると思うと、働くということがとても魅力的に思える。また、自分が家族を持ち、子供を育てることで初めて感じた親としての気持ち、家庭人としての気持ち、その思いを持った上で、「介護」という領域で働くということが、とても意味があると私は思っている。私たちが対象としているご利用者様の多くは、ご家族に支えられて生活されている。そのご家族の気持ちを察すること、またご利用者様自身の子を思う気持ち、そういったところは親になった今だからこそ想像できると感じることもあるからだ。私は社長が言われた言葉でとても心に残った言葉がある。それは「家族に自慢してもらえよう人になってください。」という言葉だ。私を理解して働くことを応援してくれる家族に自慢してもらえよう仕事ができるように、努力していきたいと思う。

■ 介護支援専門員になって思うこと

在宅支援の仕事がしたいと思い、創心會に入社して1

年が過ぎた。始めは在宅支援の仕事なら介護支援専門員でなくても良いかなとも思っていたが、実際にこの1年、介護支援専門員として仕事をしてきたからこそ見えてきたこともある。入所サービスや通所サービスではなかなか入り込めなかったご家族の歴史やそれぞれの思いをご自宅に訪問することで直に伺う機会が得られ、ご利用者の生活の背景をより深く感じることができるようになった。ご利用者様の心に沿う支援をするためにはやはりご利用者様の人生の歴史を知ることが重要なのではないかと思う。また、ご利用者様の生活を支える介護保険制度がまだまだ未熟な制度であり、問題点が多いことも感じた。核家族化が進み、高齢者世帯が増加、近隣との助け合いが望めないケースも多く、サービスとサービスの隙間を埋める資源が不足している。介護支援専門員の業務範囲はどこまでなのかという問題もあり、仕事の仕方は人それぞれになっている。そんな中、介護支援専門員はご利用者様を支えるチームの構築のスキルアップが求められている。介護支援専門員は制度の変化、社会の変化に応じて勉強し続けることが求められる職種であり、変化に富んでいるところが魅力の一つなのではないかと思う。また、チームの構築を通じて様々な人と出会えるところも魅力だ。私はこの介護支援専門員という職に会い、ご利用者様を支える様々な職種、地域、企業の取組みを知り、皆それぞれの立場から思いやり、働きかけ、支える姿を目の当たりにしている。チームの一員として恥じないよう、ご利用者様の心に沿う支援ができるよう、常に自己研鑽していきたいと思う。私は今日も素敵なチーム、素敵にご利用者様と出会っている。

みんなに支えられて

藤束 操

私は岡山の県北で育ち、結婚、3人の子に恵まれました。30代の時に玉野市に転居し、55歳までは販売員として元気に働きました。退職後は趣味の踊りに力を入れ、夫が亡くなった後も趣味を生かして老人ホームの慰問や、いろいろな舞台に立って、充実した日々を送ってきました。そんな私が病気を患ったのは2年前のことでした。なぜ自分がこんな病気になったのか悔しい思いではありませんでした。1年前からは酸素をつけての生活となりました。人生の穴場になり、悩み、落ち込んでいたところ、一人暮らしは心配が多いからと、倉敷に住む娘が私を引き取り、世話をすると伝えてくれました。しかし酸素をつけての生活ですから、外出の機会は減り、気分は落ち込みました。そんな時、娘が介護保険の利用を

すすめてくれて、創心會のサービスを利用することになりました。

リハビリの先生は週に2回家に来て、リハビリをしてくれます。竹田先生は明るくて80歳の私の心にも入り込んで来てくれて、私にとっては孫のような家族のような存在になっています。今では「先生」ではなく親しみを持って「あんた」と呼んでいます。先生が帰られる時には惜しいような気持ちになります。そして先生のリハビリを受けることで、足がフワフワしていたのがしっかりした気がしています。先生が来られない日も「リハビリ」と心に思いながらできることはしようと頑張っています。介護支援専門員の猪木さんは落ち着いていて、いつも柔らかな対応をしてくれます。2週間に1回往診に来て下さる岡田先生は素朴でたくましく、初めはちょっと不愛想とも思いましたが、今では話やすく、心強い存在になり、これからも先生を信頼して全てのことを相談していきたいと思っています。それから、自分

の娘をあまり褒めるものではないのかもしれませんが、本当によく気の利く娘です。娘の夫も私を受け入れてくれて本当に感謝しています。息子たちは遠方に住んで見えない分、心に留めていてくれて、電話をしてきてくれます。私は皆様と出会えて、皆様に支えられ本当に感謝しています。

私の病気は間質性肺炎というもので、今は少し動くと呼吸がづらくなります。そんな私に竹田先生は「何か絶対にやっておきたいことはありますか?」と尋ねてくれました。私はもう1年もまともに外に出ていません。生きる限りは外の風とか、空とか、川の流れとか、身に感じてみたい…ですから私は「桜が、見たい。」と先生に言いました。今はそれが私の目標です。支えてくれている皆様のためにも、病気が今以上悪化しないように生きていくのが私の役割だと思っています。

介護の仕事に携わる皆様、病気を患い介護をされる身になるというのは、健康な時には想像がつかないほど、実に惨しいものです。しかし、このような気持ちに対応できるいろいろな職種の方がおられ、訪問して、老人にも納得できるように丁寧に説明してくれる、介護される老人の見方があることを私は身に染みて知りました。私は今、皆様のおかげで、穏やかに川の流れるようにその時を迎えたいという夢が持っています。本当にありがとう。



4月4日の夕方、藤束操様は愛するご家族、信頼する岡田医師に看取られ、お亡くなりになりました。

亡くなられるその日まで、周りへの気遣いを大切にされる素晴らしい方でした。

藤束様自身の人間的な魅力に、皆引き寄せられ導かれた気がしています。藤束様のご冥福と、ご家族の皆様のご健康とご多幸をお祈りいたします。

お役立ちコラム

創心会生活環境プランニング
原田 薫



創心会生活環境プランニング
濱田 美沙子



前回より「お役立ちコラム」では、障害者自立支援法を取り上げ、特に用具・用品に関する制度についてお伝えしています。

第2回目の今回は、障害者自立支援法の中でも、「補装具費給付制度」についてご説明いたします。

この制度は、身体障害者福祉法に位置づけられていましたが、2005年の障害者自立支援法制定の際に、同法律に組み込まれました。これは、障害者自立支援法が今までの障がいの種別（身体・知的・精神）ごとの縦割り制度の仕組みを一元化することを目的としているからです。

ところで、皆さん「補装具」とはどのような物をいうかご存知でしょうか？

障害者自立支援法の「補装具」とは3つの条件があります。同法律には、1. 障害者等の身体機能を補完し、又は代替し、かつ身体への適合を図るように製作された物、2. 障害者等の身体に装着することにより、その日常生活において就労又は就学のために、同一製品につき長期間にわたり継続して使用される物、3. 医師等による専門的な知識に基づく意見又は診断に基づき使用されることが必要とされるものと位置づけられています。といっても、抽象的でわかりにくいと思います。上記のことを簡単に言うと「補装具」とは、体の機能を補うもので、ずっと身につけるものであり、専門的な理由が必要な用具ということになります。

次に、「補装具費給付制度」について簡単にお伝えいたしますが、この制度は各地方自治体によって若干異なりますので、今回は倉敷市を取り上げます。

この制度の目的は、障害者の方が日常生活を送る上で、必要な移動の確保や、就労場面における能率の向上を図ったり、障害児が社会人として独立・自活するためであり、補装具を1割負担で利用できる制度です。

対象となる方は、身体障害者手帳の交付を受けた方で、補装具費の支給が必要であると認められた方です。どのような方が認められるかというと、身体障害者の方であれば、原則、身体障害者更生相談所というところが判定を行うことで判断されます。判定を受けるためには、ご

本人が直接、身体障害者更生相談所に行かなければなりません。また、判定を受けることができる日も月に数回と決まっているため、かなりの制限があります。また、身体障害児の方であれば、原則判定は不要で、医師の意見書のみで認められます。ただし、これらはあくまで原則であり、補装具によっては、医師の意見書があるものや判定があるもの等、複雑な場合があります。

そして、利用方法ですが、償還払い方式と代理受領方式の2種類があり、市町村と更生相談所、補装具製作(販売)業者とのやりとりになります。また、申請用紙は、補装具により様々であり、たとえ申請したとしても、判定が下りるかどうかはわかりません。

したがって、「補装具給付制度」を実際に活用しようとすれば、第一に各地方自治体の障害福祉課にご相談することが必要だと思います。

今までご説明したように、この制度は仕組みや手続きが複雑で時間もかかります。また、日本の制度は、諸外国に対し、比較的充実している一方で、各制度のしくみが必要な方に周知されにくいとも言われています。なので、ご利用者様がお困りの際に、このような制度を1つの選択肢としてご提案できれば、少しでもご利用者様のお役に立てることができればと思います。

新入社員特集

新入社員紹介

[本部ブロック]

□創心会訪問看護ステーション

井戸 麻乃

いつも笑顔を絶やすことなく頑張ります。また、ご利用者様の心の声に耳を傾けられるOTになりたいです。



□創心会訪問看護ステーション

高橋 俊行

利用者様の心に添った本物ケアを目指し、成長していきたいです。



□創心会リハビリ倶楽部児島

端 一樹

色々なことにチャレンジして、新しいことを創っていきたいです。



□創心会リハビリ倶楽部吉備

筑地沙里菜

心に残る介護福祉士を目指して一生懸命頑張りたいと思っています。



□創心会リハビリ倶楽部陵南

中山 倫子

ご利用者様に会って良かったと思っていただけるケアをしたいです。



□創心会リハビリ倶楽部琴浦

田川 将之

まだ未熟者ですが、気合いとど根性で頑張りますのでよろしくお願ひします。



□創心会リハビリ倶楽部吉備

仲本 幸平

介護にはまだまだ詳しくないですが、やる気はあるので頑張ります。



□創心会リハビリ倶楽部児島

藤森 春香

初心を忘れず、明るく元気に笑顔で頑張ります。



□創心会ヘルプーステーション

倉敷 武田 淑佳

初めてのことも多く不安もありますが、笑顔と感謝を胸に、頑張りたいと思います。



□創心会リハビリ倶楽部茶屋町

文箭 亮介

「一勝より一生」をモットーに、必要な人材になれるよう、日々勉強していきたいです。



□創心会リハビリ倶楽部茶屋町

木村 萌

よく変な奴だと思われがちですがこれから変えていく予定です。皆様どうぞよろしくお願ひします。



[倉敷ブロック]

□創心会リハビリ倶楽部笹沖

秋山 大樹

社会人としての自覚を持ち、笑顔の絶えないスタッフになります。



□創心会リハビリ倶楽部中洲

田中 克茂

笑顔と感謝と根性と勉強好きの心を持って、何事にも全力で取り組みます。



□創心会リハビリ倶楽部水島

高橋 由美

笑顔と感謝を忘れず、ご利用者様と社員の方々に信頼していただけるよう努めます。



[岡山ブロック]

□創心会リハビリ倶楽部益野

京谷 千尋

笑顔をお忘れずに前向きに頑張ります。よろしくお願いします。



□創心会リハビリ倶楽部益野

綱嶋 孝晃

自分のできることをしっかりと行いつつ、質の良いサービスを提供したいです。



□創心会リハビリ倶楽部築港

工藤 龍太

様々なことにチャレンジしていくのでよろしくお願いします。



□創心会リハビリ倶楽部邑久

松下 貴文

笑顔と学ぶ姿勢をお忘れず、一所懸命頑張ります。よろしくお願いします。



□創心会リハビリ倶楽部益野

竹内 智哉

ご利用者様に笑顔になって頂けるように一生懸命頑張ります。



[福山ブロック]

□創心会リハビリ倶楽部笠岡

久保田裕貴

感謝の気持ちを常に胸に、熱意と気概を持って日々精進します。



□創心会リハビリ倶楽部新涯

向畑 歩美

笑顔をお忘れず、いろいろなことに挑戦していきたいと思っております！



□創心会リハビリ倶楽部新涯

東谷 知恵

ご利用者様に「本物ケア」を提供できるよう頑張っていきたいと思っております。



□創心会訪問看護ステーション
サテライト笠岡

カ石 藍

創心會の一員として、毎日笑顔で元気に頑張ります。ご利用者様との信頼関係を築いていきたいです。



□創心会リハビリ倶楽部笠岡

平野 靖子

これからよろしくお願いします！



□創心会元気デザイン倶楽部新涯

渡邊 健太

この研修で出来るだけいろんな知識を吸収して、現場で活かせるよう頑張ります。



□合同会社 ど根性ファーム

川原 雅規

はじめまして。皆様とは職種が異なって農業をすることになります。「ど根性」という会社名の通り、気合いを入れて農業をしていきます！！皆さん合同会社「ど根性ファーム」共々よろしくお願いします！



認知症ケア プロジェクト

認知症の方への排泄の支援 ～失禁を防ぎ心地よく～

認知症部会リーダー 創心会訪問看護ステーション
リハビリ倶楽部部門長 作業療法士 吉中 京子

周辺症状に対する対応の2回目は「排泄について」。排泄が上手くいかないことで認知症の方が不隠・興奮されたりすることがありませんか？どうして、不隠になったり、興奮されてりするのでしょうか？私たち自身に置き換えて考えていただきたい。ズボンが汚れている・・・何か臭いがする・・・。私たちは原因が分かり対応が出来るし、未然に防ぐことは出来る。認知症の方は原因がわからず、不快感だけを感じ、不隠・興奮といった行動に起こしてしまうのだ。では、認知症の排泄の失敗の理由に考えていきたいと思う。①脳の機能的障害のため、排泄コントロールが出来なくなる、②トイレの場所が分からない、③排泄の方法を忘れてしまっている、④行動が緩慢になって間に合わない、⑤不安・やる気が起こらない、⑥何もすることなくて落ち着かない等が挙げられる。場面別の対応の方法について以下に述べていきたいと思う。

- 便失禁の場合：①個々の排便パターン、排便前のサインを知って、トイレ前へ誘導する
②排便パターンに留置し、排便がありそうな日のご本人の言動、においに注意を払い、失禁してしまってもすばやく対処する
③便失禁があっても「大丈夫」という態度を徹底し不安がらせない

- 下痢時の場合：①食事の内容に注意する（例：食物繊維の少ない食べ物の提供）
②ご本人の口にしましたもので、不通なものがあったか探る（食べ物以外）
③下痢をすると、不安や混乱が増強しがち、周囲の関わりや楽しみ事で気分を紛らわす等の配慮をする
④便の性状・量・頻度・食欲を観察し、医師に相談する

- 便秘時の場合：①便秘をあきらめず、自然排便への援助を行う（安易に下剤に頼らない）
②排便パターンを捉えて、便秘の原因を取り除く（運動不足、身体の屈伸、飲食物の質・量、排便習慣のなさ、薬剤の副作用など）
③排便パターンに応じて適時・適量の下剤量となるように医師に相談する（効きすぎは、苦痛・不隠を招くことがある）

（豆知識コーナー）

認知症の勉強会にて、デイサービスのスタッフから「認知症の方への関わりとして声かけの内容を統一と良く聞かすが、関わるスタッフに対する印象で認知症の方の受け取り方が変わるのでは？」と質問を受けた。調べていくとこのような答えをみつけた。

答えは、スタッフ側の心のバランスによって印象が変わってくるそうだ。理由は、スタッフの心のバランスが不安定であれば声のトーンや表情に出てきており、認知症の方ももどかしさを感じる。スタッフの心のバランスが安定していれば対応にもゆとりが出て、それが認知症の方の安心、理解につながっていく。そして、「人を尊重した声かけ」には認知症の症状を落ち着かせる効果がある。みなさん、どうですか？私は、この答えをみつけた時にはなるほど!!と思った。サービスって提供することばかり考えがちですが、スタッフの心の安定もサービス提供の1つであるのだ。

引用・参考文献

永田 久美子：ケアスタッフのためのアルツハイマー病のケアの要点
認知症部会など各種勉強会での使用した資料





生活力デザイナー プロジェクト

生活力デザイナー

琴浦センター リハビリ倶楽部琴浦

管理者 土澤 裕

今回「生活力デザイナー」に関する執筆依頼を受け、改めてこれまでの歩みを振り返る機会となった。私は創心會に入社して5年目であり、2年目の夏より生活力デザイナーのプロジェクト（現リハケア推進プロジェクト）に参加している。今回は生活力デザイナーに関するこれまでの歩みや自分なりの想いをお伝えできればと思う。



まず、生活力デザイナーという社内資格を皆様どう理解されていますか？「ベッドメニューを行う人」「フロアスタッフと違う人」といった特別な存在と認識していませんか？確かに、直接ご利用者様の身体に触れ、メニューの考案や実施等を行うため、そう捉えられるかもしれない。しかし、生活力デザイナーはトータルケアをする上での1つの役割である。デイサービス内の動きを考えた際には、フロアの役割の一つなのである。介護職、看護職、リハ職、生活力…全ての役割が一つになってこそトータルケア。では、なぜ生活力デザイナーという資格が出来たのか、これからお話をしていこうと思う。

創心會の利用者様は、在宅で生活される生活主体者であり、それぞれ目標や夢が存在する。ある方は、「もう一度一人で歩いて旅行をしたい」、ある方は「家での生活を続けたい…」など様々。しかし、日常生活にはバリアーや、心が落ち込む原因がたくさん存在する。そこで、生活力デザイナーの役割として、まずは、目標や夢を達成するために、「その気」になっていただく心づくりを行うことが挙げられる。それとともに、生活そのものに目標を置き、様々な手段（機能訓練、ダイレクトアプローチ、環境整備、社会支援等）を用いて自助努力を引き出し、生活する力をつけて頂く。そして、その人らしい生活を共にデザインし、心に添った本物ケアを実践していく事が役割になる。つまり、生活力デザイナーとは、ご利用者様が主体的に生活する力を身に付けら

れるよう、その人らしい生活を共にデザインし、実践し、実現することをサポートする創心會独自の社内資格制度といえる。

生活力デザイナーが設立された経緯には、創心會の歴史が存在する。生活力デザイナーは、当初は機能訓練再編プロジェクトとして発足した。この機能訓練再編プロジェクトでは、リハビリは失われた身体機能の回復のために行うというイメージや、リハビリは療法士にしてもらうものといった療法士依存の考えを払拭したいという思いから始まった。当時、「リハビリ＝機能訓練」「リハビリは療法士にしてもらうもの」といった医学的リハビリテーション領域が世間一般論になっている状態であった。しかし、本来のリハビリは障害を持つ人に対して、可能な限り回復・治療し、残された能力を最大限に高め、身体的・精神的・社会的に出来る限り自立した「生活」をする援助のことを指す。（Rehabilitation＝再び適した状態にすること）リハビリは「生活」そのものに「目標」を置き、ご利用者様が自ら主体的に行えるようになることを目指し、様々な手段を用いて目標を達成するものである。

そのため、創心會では、「してもらいリハビリからするリハビリ」に転換したいと考え、療法士以外のスタッフで、日常生活の改善をイメージしながら必要な徒手のリハビリを行うことができる者、マシントレーニングの提案や生活動作に応用できるようなアプローチを行える者を育成しようと考えた。また、他にも「徒手訓練のみならず日常生活の自立につながるフロアのリハメニューをより充実させたい」「ご利用者様の増加に伴ったニーズの多様化に対応したい」「全ご利用者様に対応できるマニュアル化された基礎メニューを作成したい」「リハビリ技術の向上及びリスク管理ができるようになりたい」等の思いがプロジェクトの始まった。ベッドでのリハビリから、在宅生活に目を向け、生活目標に添った動作練習の充実を図ることを目的とし、生活力デザイナーが誕生した。その後、生活力デザイナーとなったスタッフ数名が加わり、生活力デザイナープロジェクトへと変貌を遂げていった。

生活力デザイナーのプロジェクトでは、生活力デザイナー制度の制定や生活力デザイナー3級・2級を取得するための支援、資格を取得したスタッフへのフォロー体制強化のための研修運営を主に取り組み、生活力デザイナーの習得者が増えていった。そして、より専門的にご利用者様に関われるよう、リハと介護の両方の視点を養うようにすると共に、生活力が主体となってリハケアを全スタッフへ発信し、創心會スタッフ＝生活力デザイナーとなるよう「リハケア推進プロジェクト」と名前を変えた。そこでは、生活力デザイナーとリハスタッフが

協力し、本物ケアに向かって一步一步進んでいく。そして、生活力デザイナーという言葉も社内では多く飛び交うようになり、本物ケアを実際に考え取り組むスタッフも多くいる。

ただし、生活力デザイナーを取得しただけで満足してはいけない。取得することが終わりではなく、自分自身がリハケアについて学ぶ習慣を付けるための基礎的な資格であると捉えていただきたい。学習を重ね、知識・技術を培うことでご利用者様の「心豊かな生活」を一番近くで支援できる人財になっていく。学ぶことは、ご利用者様、自分自身、創心會の力となる。しかし、生活力デザイナーを取得することで多くの悩みも持つことになると思う。実際にご利用者様と関わりを持つと、ご利用者様からはリハビリの専門家として見られ、先生と呼ばれることもある。理学療法士、作業療法士といった専門資格をもたない自分の立場がわからなくなったり、先生ではないのに、同じような知識・技術があると見られ、責任が重たく感じ、不安や心配である・・・といった声も多くの生活力デザイナーから挙がっている。しかし、私はその悩みは凄くよいことだと確信している。悩みが生まれなければ成長はない。悩むことで、学ぶ姿勢が生まれ、自分自身の成長につながる。ただし、その悩みは自分一人でかかえることではなく、上長、先輩スタッフ、同期、後輩・・・たくさんの協力していただけるスタッフが創心會にはいる。一人で悩むのではなくみんなで悩み解決することでチームとしての力も養える。こんなプラスなことがおきる悩みは常に持つておくとういだろう。

ただ、実のところ私は生活力デザイナー3級の取得後、ご利用者様との関わり方に対して悩みを持たなくなった。なぜなら、生活力デザイナーを取得するために学んだ知識、技術が支えとなり、関わりが増えたことで、入社当初に抱いていたご利用者様に対する関わり方の不安が消えたからである。ご利用者様と関わるのが楽しくなった。ご利用者様は何らかの想いを持って、真剣にデイサービスをご利用されている。自分の関わりにより、ご利用者様の笑顔が増え感謝の言葉をいただくこともあった。もちろん、否定的な言葉をいただくこともあった。その一つひとつの言葉を深く受け止められるようになり、真剣にご利用者様のことを考え、伝え、想いを共有することで、信頼されるようにもなった。知識、技術は後からでも努力次第で身に付けることができる。ご利用者様のことを真剣に想うことは、努力は要りません。その方を好きになろう。ただそれだけだ。そして、生活力デザイナーの資格が活かせるように自分たちで役割を明確にしていくことが大切だと思う。生活力デザイナーという職種を自分たちの力で確立していこう。

最後になりましたが、ここまで読んで頂けた皆様あり

がとうございます。少しでも生活力デザイナーという社内資格を知って頂けたら幸いである。そして、現生活力デザイナー取得者、これから生活力デザイナー取得を検討している方の力になればと思う。

リハケア推進プロジェクト ～生活力デザイナー～

訪問看護ステーション 理学療法士 千葉 好浩

リハケア推進プロジェクトメンバーに入らせていただき、2年目を迎えている。私自身、理学療法士ですが、以前は生活力デザイナーとしてリハビリ倶楽部、グループホームでの勤務経験がある。生活力とは何か、リハビリ特化型サービスにおける生活力デザイナーの役割を当時の管理者の方と話す中で、ご利用者様の「生活」をしっかりと知ることができているのかという話題になった。

ご利用者様宅への訪問時、ADL動作を確認し、生活の中でどのようなことに困っているのか（ご本人様・ご家族）のアセスメントを行い、リハビリ倶楽部でどのようにアプローチすればよいか検討を行った。数多くのご利用者様宅への訪問を通じ、生活力デザイナーの役割とは何か理解できた事を覚えている。

生活力デザイナー3級の役割として①してもらうリハビリから主体的なりハビリへの転換の促し（創心會らしいサービス提供）②新規対応が出来る（アセスメントが出来る）ことがあげられる。生活力デザイナー2級の役割は3級より具体的となり、①的確なアセスメント（新規対応も含む）によりデマンド+ニーズ=ホープに導く、②生活動作を分析する視点もて、その分析に基づくメニュー提供発信が行える、③基礎知識を習得した上で、部門・ブロック間の相談窓口やスタッフの勉強好きを促す、④フロアでのオペレーション（ベッドメニューやフロアメニューが行える、身体機能・精神機能の把握が出来て、フロアスタッフと共有できる）、⑤成功事例の発信（機関誌・本物ケア学会等）等があげられる。

現在、訪問リハビリの新規のご利用者様に対して、はじめに必ず「生活」という観点からアセスメントさせていただいている。これは理学療法士だからこそではなく、生活力デザイナーとしてリハビリ倶楽部で働くことができた経験からも生まれていると感じている。

現在、生活力デザイナープロジェクトメンバーとして関わり、勉強会にも参加している。メンバーの皆さんが日々、課題を持って取り組まれている姿や、ご利用者様の視点に立ち、センターのスタッフの方々と連携を図っ

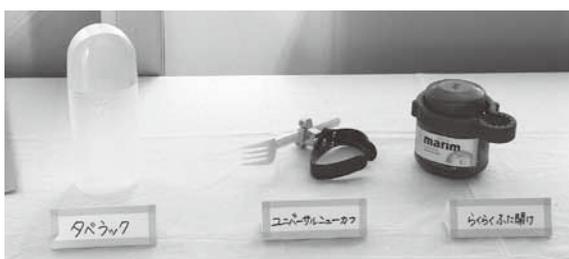
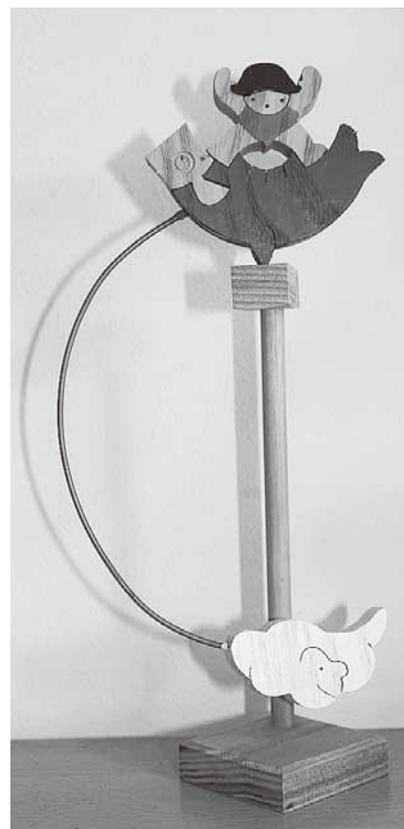
ている姿がとても印象的である。昨年のフォローアップ研修では、私が訪問しているご利用様々の症例検討を行いました。いろいろな視点で考えられる生活力デザイナーの皆様がいて、アプローチ方法や考え方を今でも参考にさせてもらっている。ありがとうございます。

最後に、プロジェクトメンバーが一昨年2年目で、まだまだ未熟な部分もあるが、1人でも多くの皆様へ生活力デザイナーの業務に誇りを持ち、一緒に生活力デザイナーを盛り上げてほしいと願う。



ご利用様々の作品アルバム

album



感動体験「心のバトン」



縁

本部センター グループホーム 一般

ヘルパー2級 宗吉 和幸

この2月で私が創心會に入社して丸2年が経ちました。と同時に3月で私が働いている「グループホーム心からリハビリユニット」が開設され2年が経つことも意味しています。

未経験で介護業界の門をくぐり、さらに新ユニットの立ち上げより関わられたことは、私にとって幸運な出来事でした。思い返せば私は様々な出会いのお陰で、今ここに立っているのだと痛感いたします。

入社のかっかけとなったのはハローワークが主催していた他社との合同説明会でした。そこで人事方から話を聴き、創心會の理念に共感を覚えました。しかしそれ以上に真摯な対応が創心會の社風を醸し出しているようで、私の選択の後押しをしてくれました。

入社してからは管理者の方から様々な面で支援をいただきました。ユニットが立ち上がって現場が試行錯誤の日々で大変な中、未熟な私のことも気かけ相談に乗ってくださいました。管理者の方が頑張っている姿は、我々スタッフのやる気の源にもなっています。

ご利用者様とも様々な出会いがありました。未経験ながら他のスタッフと比べても色々なご利用者様の担当に付くことができ、ケアプランの作成などで多種多様なケースに触れることができました。私が初めて担当についたA様は、グループホームではめずらしく在宅復帰前提

のご入居でした。グループホームでの生活に慣れていただくことは勿論の事、体力維持・向上の為のリハビリの実施、ご自宅に戻られてからの役割の獲得（食器・洗濯物の片付け、買い物への同行）、これらを復帰されてからのご家族の手助けにもなるように書類にまと



めてご提供する等の一連の過程は、私にとって貴重な経験となりました。もちろん一緒に働いている仲間、他部門でご協力いただいている方々、ここでは書ききれないほどの多くの人々の出会いがあって今の私が形作られたと思っています。どの人が欠けても今の私はいないと思います。この2年間の出会いに感謝して、今後は私自身が他の誰かにとって少しでも実りある縁になれるよう成長していきたいと思っています。

私からのバトンは、人事部の三宅さんをお願いしたいと思っています。よろしく願いいたします。

二度と忘れられない二年間 ～多くの事を学んだ現場経験～

本社 業務管理 白神 光章

私は平成22年4月に創心會に入社しました。今年で三年目になります。

創心會に入社して二年間の間に、三つの事業所を経験させていただきました。



- ①H22.4～H23.2 リハビリ倶楽部益野でデイの職員
- ②H23.3～H23.12 リハビリ倶楽部築港でデイと事務の兼務
- ③H23.12～ 支援本部の業務管理

こうした異動や、業務の変動によって、多くの方と関わらせていただきました。自分が関わらせていただいた岡山ブロックの方々は、本当に素晴らしい方ばかりでした。今こうして自分が楽しく仕事が出来ているのは、皆様のおかげであると思っています。本当にありがとうございます。

私はデイサービスで二年近く現場経験を積ませていただきました。その二年間の中で、「親身になることの大切さ」を学びました。

リハビリ倶楽部築港に勤めて半年ほど経ったある日の事です。その日、私はリハビリ倶楽部益野へ応援の為に出勤しました。その日は、多くのご利用者様と再会しました。そんな中で、あるご利用者様が、「白神さん、久しぶりに会えてうれしいです。また一緒にあのアクトをしましょう！」と本当にうれしそうに声を掛けてくださりました。

そのご利用者様は、初めて自分が見学対応をさせていただいて、そのまま利用につながった方でした。

自分と再会できた事をとても嬉しいと言ってくださいました。その光景を見た他のスタッフの方が、「あんなにうれしそうなお〇〇様は初めて見たかもしれません」と私に伝えてくださりました。

私が創心會の面接に行かせていただいたとき、「なぜあなたは仕事をされるのですか」という質問を受けました。その時私は、「自分の価値を周りの人に知っていただきたい、自分の価値を証明したい」と答えました。

この出来事を通じて私は思いました。これは、自分の価値をしっかりと証明することができるのではないのかと。自分の為に喜んでくださったり、叱ってくださったりしてくれる人がいる。自分の存在を認めているので、きっとそういった行為につながっているのだと思います。「親身になる」というのは、その方の為に一生懸命になるという事であると私は思っています。

現在私は支援本部で働かせていただいています。難しい事も多々ありますが、現場で培ってきた知識や経験が本当に活着いていると思います。何より、今まで一緒に働かせていただいた多くの仲間の存在が、自分にはとても大きく、それでいて誇りであります。こんな未熟な自分を支えてくださる皆様に本当に感謝しています。これからは支援本部として、ご利用者様はもちろん、スタッフに対してもより親身になる事を心掛けて、働く環境作りを支援して行きたいと思えます。

私からのバトンは、支援本部の植田さんにお渡しします。

野菜作りを通して顧客満足度を高める

水島センター リハビリ倶楽部水島

看護師 橋本 美喜子

はじめに

美味しい新鮮な野菜を食べると、野菜作りがしたくなる。今や、野菜作りのブームで、著書も数多く出版されており家庭菜園に多くの人が憧れている。

ご利用者様の中には、野菜作りをしたい、料理を作りたい等の目標をあげられる方もいる。園芸療法は、植物を育てる作業を通して、心理的な安定と、心身の機能の向上を図るといわれている。また共同作業を伴うので、社会性の維持にも効果があるといわれている。幸いにも水島センターには、玄関前の駐車場に10畳程の畑があり、3年前から土壌改良に挑戦し、リハビリの一環として野菜を育て収穫し、味噌汁、おやつ、実践調理にと活用しているので、今日はその取り組みを紹介する。

ご利用者様と共に取り組む野菜作り

当時、昼食の味噌汁に薬味が付いていなかったため、畑にネギを植えようとしたが、土壌は粗い砂で土が硬く野菜作りに適さず、まずは有機栽培を目指しドライバーさんの協力の下に、ご利用者様の助言や野菜作りの本を参考にして土壌改良に挑戦した。土に昼食の残飯・落ち葉・枯れ草・油粕・石灰・粉殻・鶏糞・浄水場の泥土等の多種類の材料を混ぜて耕し、すると、土が徐々に茶色に変わり、たくさんのミミズが住む肥沃な土に改良出来たのだ。

そして、野菜作りを始めると、野菜の成長とともに鳥や害虫の襲来を受け、野菜作りの難しさに悩まされた。野菜作りに経験豊富なご利用者様から野菜を育てるためには、低農薬・化学肥料も必要で、また過度の愛情（肥料・水やり）は要注意と教わり、経験を積む毎に美味しい野菜が育つようになっていった。昨年はネギ・ニラ・ナス・トマト・きゅうり・玉ねぎ・オクラ・枝豆・ジャガイモ・サツマイモ・菊菜と四季を通じて野菜を栽培し収穫できた。また、野菜作りは、ご利用者様とともに育てて収穫したものを調理して味わうのが目標で、責任者と相談して今では、水島センターの年間行事に組み込まれ実践に至っている。作付け、収穫日にはご利用者様を誘って、椅子や車椅子で見学する人、動ける方は作業していただいている。ご利用者様が外に出て日光や風に当たり、畑を見る事で季節を感じ、成長を見て楽しまれ、作業に生き生きとされている光景を見てやりがいを感じる。

そして、収穫したジャガイモや、サツマイモはおやつ作りに、またニラは春から秋にかけて、ネギは1年中、刈り取ると芽を出し味噌汁の味を引き立てます。このように、野菜作りには育てる楽しさ、作って食べる楽しさ、コミュニケーションの楽しさがある。日差しが暖くなる春は、野菜作りシーズンである。ドライバーさんが冬の間に植え付けの準備をして下さっている。まずはジャガイモから始めようと思う。野菜作りでご利用者様に癒しと有意義な時間を提案できるように頑張りたいと思う。



■創心會グループ 個別企業説明会開催

日 時：6月3日(日) 10:00～12:00
場 所：創心會本部センター2F 大会議室

■ハートスイッチ特別講座 ～いまさら聞けない介護技術・知識編～

日 時：6月21日(木)
日中(10:00～) / 夜間(18:00～)
90分講座
受講料：ワンコイン! 500円
場 所：創心會本部センター2F 研修室
テーマ：『介護職員のための接遇マナー』
*申し込みはハートスイッチまで
URL:<http://www.herat-switch.com>

■第2回旅リハ開催

～鳥取県 花回廊と海鮮三昧～
出発日：6月24日(日)
(株)創心會本社駐車場
8:30集合 9:00出発
申し込み期日：5月31日 16:00まで
詳細は各デイサービス管理者まで

《入社式開催》

■H24年度入社式開催

平成24年3月31日 本部センター2F 研修室にて執り行われました。



創心會 Topics



Cafe Oyatsu

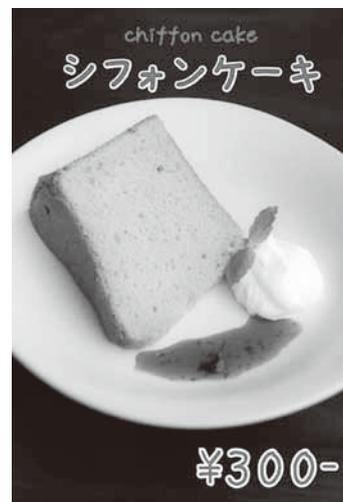
〒709-1215
岡山県岡山市南区片岡
2468
(岡山市サウスヴィレッジ内)

人気商品のご案内

みどり玄米粉使用の
“シフォンケーキ”です!!
単品 300円です。
セットなら450円でお好きなドリンクがついてきますのでお得ですよ!!

*詳しくはfacebookページまで

www.facebook.com/cafeoyatsu



編集後記

春の訪れとともに26名の新入社員の方を迎え、創心會は新たなスタートを切りました。

このジャーナルが発行される頃には、1か月の研修期

間を終え配属先でのエキサイティングな毎日が始まっている頃でしょう。あっぱれ制度による歓働環境の整備、施設内通貨制度の始動、そして合同会社ど根性ファームの設立。まさに羽ばたきはじめてばかりのフレッシュアズの皆さんを優しく厳しく包み込みながら、創心會はいよいよ新しいステージへと歩を進めていきます。

編集部 三宅

書名 株式会社創心會[®]機関誌『2012年春号』Vol.13
The Journal of True Care
発行者 株式会社 創心會[®]
〒710-1101 岡山県倉敷市茶屋町2102番地14
創刊日 2009年5月1日
発行日 2012年5月1日
定価 500円(税込)

※無断転載は固くお断りいたします。

創心から



総合ケアサービス
株式会社 創心會®